**YASUTO NOTE 12**

**「PEACE 日の丸」が日本と世界を救う**

　　　　　　　　　　　　　　　　　　2023.5.20

　　　　　　　　　　　　　　著作　福岡県　片山 泰都

―　目次　―

１．緒言　　･･････････････････････････････････････････････････････････････････････････････ 2

２．日本の本当の国柄は「平和・人権尊重・万民平等」 ･･･････････････････････････････････ 3

３．「日の丸」について ･･･････････････････････････････････････････････････････････････････ 6

　3-1．「日の丸」が「WAR日の丸」として悪者扱いにされた、日本の大反省が必要 ･･････････ 6

　3-2．今、岸田内閣は米国の注文通りに、国と国民の墓堀を喜々として進めている　････････・ 6

　3-3．今、本来の「日の丸」（＝「PEACE 日の丸」）の力を発揮すべき時　･･････････・・・・・・・・・ 7

3-4．具体的な「PEACE 日の丸」の政治活動について　･･････････・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8

3-5．自民党や維新の会の「日の丸」と区別がつかなくなるのでは？という疑問に対して ････ 9

４．今の時代に対する正しい処方箋を出すために１６世紀以降の歴史を振り返る･････････・・・ 10

　4-1．衝撃的な歴史 ･････････････････････････････････････････････････････････････・・・・・ 10

　4-2．第二次戦後の本当の歴史も、実は衝撃的 ･････････････････････････････････････・・・ 11

　4-3． 今の日本は悪魔の支配下にある ････････････････････････････････････････････・・・ 13

　　4-3-1．日本は米インド太平洋軍に植民地支配されている　･････････････････････････・・・　13

　　4-3-2．原発問題 ･････････････････････････････････････････････････････････････････・・ 14

　　4-3-3．欧米人のおぞましいアジア人蔑視 ･･････････････････････････････････････・・・・・ 14

５．日本文化とディープ ステートを生み出した西洋文化について ････････････････････････・ 15

5-1．日本文化、ユダヤ教・キリスト教について知る　･････････････････････････････････・・ 15

5-2．「日本精神」の深掘り　 ･･･････････････････････････････････････････････････・・・・・ 19

5-3．西洋の不完全さを知り、「日本精神」により西洋を昇華させる･･･････････････････・・・ 21

5-4．「朝廷・幕府併存」は「日本精神」が政治体制として形になったもの ･･･････････・・・・・ 21

5-5．西洋文明の根本的な問題点とそれを克服する日本精神 ･････････････････････････ 23

６．安倍元首相暗殺事件にもディープ ステート（深奥国家）の闇が？･････････････････････　25

７．結言 ････････････････････････････････････････････････････････････････････・・・・・・・・ 26

**（補足１）**～**（補足７）**･･･････････････････････････････････････････････････・・・・・・・・・・・ 27～32

1. 緒言

直近の西日本新聞１面見出しは、次のようなものです。5月1日「特需と混乱 揺れる島 馬毛島基地着工４ヶ月 作業員集まる種子島」、5月2日「オスプレイ佐賀配備へ 地権者側用地売却決定」、5月3日「住宅街に兵器が来る日 きょう憲法記念日 反撃能力 熟議なく」、5月4日「 憲法判断 避ける司法 安保法違憲訴訟 全て原告敗訴 元裁判官「政権に忖度」、5月5日「子育て支援費 97％で増額 九州７県全233市町村」、5月6日「米軍は聖域？憲法後回し 安保一体化の影 九州も、轟音ここは日本か」。5月5日の子供の日を除き、他は全て日本国憲法施行から76年続いた平和国家から、軍国主義国家に変容しようとしている昨今の世相を反映したものになっています。大手メディアもこれに危機感を持っており、読者に警鐘を鳴らしているのは事実だと思います。しかしながら、ここ10年前位から私のような一般人にも明らかになってきた日米合同委員会（在日米軍）による日本に対する植民地支配が、敗戦から今日まで続く根源的な問題です。それを終わらせ、日本が本当の意味で自立した独立国家になる以外に、日本が抱えている様々な問題を解決することは不可能だと思います。明治維新（1868年）から155年になる今、日本国は国の精神・魂を喪失し、若しかしたら国自体も消滅する最大の危機を迎えているように思います。

　　 　その危機を克服するためには、日本精神を復活させる以外にないというのが私の考えです。

　　　西洋のキリスト教文化の中に潜み込んだ拝金主義・植民地主義を退け、自己中心主義を克服し、更にマルクス主義（科学的社会主義）をも包摂する、日本精神はそれが可能です。西洋文化は科学技術を目覚ましく発展させ、社会の利便性・効率性を著しく向上させました。しかし、他者の価値観を認めることが出来ず、弱肉強食社会・戦争社会を作り出し、更に生態系を破壊し、気候危機を生み出し、人類消滅の危機を克服する目安を持てていません。第三次世界大戦勃発の危機は、日増しに高まっています。西洋が発明した民主主義は、国民の政治参加意識が高く、また三権分立がきっちり機能しない限り、うまく行きません。米国でも不正選挙が存在するという理由を原因として、民主党と共和党の激しいせめぎ合いがあります。これは、西欧型民主主義の危機だと言えると思います。敗戦後直の1950年に、マッカーサー元帥の指示で警察予備隊（自衛隊の前身）を創設したフランク・コワルスキーは、「結局、民主主義とはどのように軍部をコントロールするかに尽きる」と述べたそうです。民主主義は、自国の軍部（諜報機関を含む）をコントロールすることも難しいのに、日本の場合は日本の政治権力が及ばない在日米軍が存在し、その在日米軍が有事の際に自衛隊を自分の指揮下に置こうとしています。つまりこの構造は、自衛隊に日本国民のシビリアンコントロールが効かなくなるということを意味し、日本の戦後民主主義は終焉を迎えようとしているということになります。戦前、軍部は「絶対不可侵の天皇」を利用して、行政・司法・立法の三権とメディアを支配下に置き、大戦争を遂行し、国を滅亡寸前にまで至らせました。戦後、在日米軍は日本国民に明らかにしない形で、日米合同委員会を設け、日本の官僚を在日米軍が直接支配する構造を作り上げました。憲法上国権の最高機関とされる国会よりも上に、日米合同委員会が存在し、日本は事実上独立国ではなく、民主主義も見せかけだったということです。今、日本の国の状況は、在日米軍基地周辺を中心に凡そ1000人位いると言われるCIA（中央情報局）やNAS（国家安全保障局）の米国諜報員により、政治的及び経済的な細部の情報を収集され、丸裸状態だと思われます。まさに、ロシアに亡命したエドワード・スノーデン氏が、2013年6月に日本のことを心配し、米国の悪行を暴露してくれましたが、それが今更に深刻になっていると思われます。そして、この在日米軍による日本の支配体制を終了させることは、殆ど絶望状態だと思われます。このような状況を前提とした上で、どうすればこの絶望的な日本の政治状況を転換し、日本を自立した独立国へと導くことが出来るか？

　私は、「（PEACE）日の丸」に日本の生き残りと再生を託したいと思います。何故か？明治開国以降の歴史の中で、日本人は欧米支配者から、まるで催眠術に掛けられたように巧みに、日本という国が持っている能力と歴史的な使命を毀損する方向へと誘導され続けており、この催眠誘導から日本人を解放するもっとも効果的な方法は、日本の様々な場所で「（PEACE） 日の丸」をはためかすことだと信じるからです。三島由紀夫は米国支配者のその邪悪な魂胆に気付き、自衛隊に奮起を促す為に1970年11月25日45歳の時に、陸上自衛隊市ｹ谷駐屯地東部方面総監室を「楯の会」メンバー４人と共に訪れ、増田兼利総監を人質に取り籠城し、自衛隊の決起・クーデターを求める演説を行い、最後は割腹自殺するという大事件を起こしました。右翼の三島由紀夫は、武力で米国（在日米軍）から日本を解放しようとしたのです。また、日の丸を否定する左翼全学連等は、西洋民主主義から生まれた示威行動により日本解放を目指しました。残念ながら、圧倒的な軍事力（諜報力を含む）、経済力、社会分析能力（マスコミ支配力を含む）を有する米国（在日米軍）の前には、両者共その目的を達することは出来ませんでした。つまり、「力による日本の解放（日本の自立・本当の独立）は困難」だということです。では、どうすれば良いのか？私は、ガンジーの不服従・無抵抗運動によるインド独立達成が最大のヒントになると思っています。今はまだ何とか民主主義の形態を保ち、日本が戦争に巻き込まれることに反対する政治活動や戦争反対の議員を誕生させるための選挙活動が許可されています。これらの全ての政治活動や選挙活動で「（PEACE）日の丸」旗を掲げる運動を展開しようということです。

２．日本の本当の国柄は「平和・人権尊重・万民平等」

1918年に神戸で生まれたユダヤ人、イザヤ・ペンダサン氏は、「日本人とユダヤ人」（1970年発行）**（補足１）**という著書の中で、次のように述べています。「日本人が無宗教というのはうそある。日本人は日本教（人間教）という宗教が存在するとも思っていないし、日本教徒などという自覚は全く持っていない。しかし、日本教という宗教は厳として存在し、世界でもっとも強固な宗教である。」

私がこの本を読んだ50年前は、彼が述べた意味をよく理解出来ませんでした。しかし、私の人生の中で、家の宗教である浄土真宗の他、キリスト教、神道の影響を強く受けた倫理研究所に接してきて、彼が述べたことは「本当である」と実感しています。全国各地で無数に設けられた神社の存在の存在も、十分に彼の言葉を証明するものだと思います。

　私は、中学時代～高専時代の８年間、クラブ活動として柔道を選択していまして、最終的には３段まで取得しました。その時に学んだことが、講道館柔道の創始者・加納治五郎が唱えた「精力善用、自他共栄」という講道館（柔道）精神です。この講道館精神こそ、日本の土壌から生み出された「日本精神」と言っても良いと思います。つまり、「力（武力、知力、財力）は良い事の為に使いましょう」、「あなたも私も共に栄えましょう」ということです。今、世界を見渡してみると、如何にこの「日本精神」に反した状況、即ち「欲と欲」とのぶつかり合いの悲惨な世界になっているかが分かります。

また、立憲民主党前代表の枝野幸男氏は、「枝野ビジョン 支え合う日本」（2021年5月20日発行）という本を出し、3.11の教訓から経済、立憲主義、安全保障まで７年かけて温めてきた政権構想を公にしました。私は、「枝野ビジョン」は日本文化の本質の一端を表現し、本当に素晴らしいと思いますし、彼の考えに共鳴するところが多々あります。特に一番評価している点は、その歴史認識です。その歴史認識とは、「日本文化とは、四季がある豊かな自然と水田稲作と村落共同体が生み出した、支え合い・助け合いと寛容を特徴としており、1500年の年月をかけて育まれたものであるというものです。軍部が独走し、海外侵略に至ってしまった”昭和初期体制”は、日本本来の文化が破壊された異常な期間であった。安倍・菅政権は、この異常な期間と親和性を持っている」というものです。

　　　戦後の歴史における大きな勘違いは、この「日本精神」を正しく理解していないことに尽きます。「枝野ビジョン」に書かれていた「軍部が幅をきかす異常な昭和初期体制」に戻ることが、保守であり、日本の伝統を守ることであり、「日本精神」と見做してしまったということです。米国に巧みに誘導され、愚かで悲惨な戦争に突入したあげく、国を滅亡寸前にまで破壊せしめたことを「日本精神」の発露とすることは、大倒錯であり、国・祖先を冒涜する大罪であると言っても差し支えありません。しかしながら、自民党・公明党・維新の会・国民民主党に属する多くの人々は、改憲をする（＝戦争が出来る国にして国を亡ぼす）ことにより、この大罪に手を染めようとしています。何故ならば、**敗戦後に作られた日本国憲法こそ、為政者が「日本精神」に基づき政治を行う場合の手引き書になるからです。つまり、日本国憲法は「日本精神」を母体として生まれたということです。**

　　　国民主権は日本国憲法によって取り入れられましたが、日本の国柄（日本精神）との齟齬はなく、むしろ合致しており、戦後日本の民主主義は急激に成長を遂げ、日本発展の原動力となりました。この日本型民主主義を破壊しようとしているのが、欧米諸国に存在するディープ ステート(深奥国家)です。このディープ ステートは、日本精神（日本教＝多神教）の対局にある一神教を結集イデオロギーにしている超エリート集団だと思います。そして、経済的・軍事（諜報を含む）的・社会的に欧米世界を裏側から支配しているのではないかと推察しています。具体的には、軍産宗複合体として存在し、国連等の国際機関にもその支配力を及ぼしているものと思われます。

以下に、日本精神（日本教）とディープ ステート（深奥国家）の比較表を作成してみました。世界がディープ ステートの支配から解放されない限り、戦争は無くならず、最悪人類滅亡も現実となる可能性もあり得ると思います。

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
|  | 日本精神（日本教） | ディープ ステート（深奥国家） |
| 生まれた風土 | 自然豊かな恵みに満ちた風土、周辺の海が異民族支配を防ぐ防波堤となる。 | 沙漠地帯、常に周辺の異民族の脅威に晒される。 |
| 戦争など | 江戸時代に、戦争のない230年間を達成。他国侵略の意図がないので、人殺しための兵器開発は進まなかった。治安は刀だけでＯＫ。侍とは「哲学を持った人」を示し、彼らは「天意は人世の平安である」ことを理解していた。武士は食わねど高楊枝。 | 弱肉強食、第二次世界大戦以前はアジア・アフリカで植民地経営、大戦後も見えない形での植民地主義を抜け切れていない。米国は独立以降殆ど戦争をし続けている（戦争しなかった期間は僅か20年）。大量殺人兵器は非常に進歩。 |
| 政治など | 顕教支配、徳の第一は嘘をつかない（嘘つきは泥棒の始まり）、徳福一致、法律は大事にするが、心の動きに重要性を持たせる。  日本国憲法（象徴天皇制） | 密教支配、守銭奴（今だけ、金だけ）、表面上は民主主義の形態をとっていても、ＤＳ組織維持のためには要人暗殺を実行する等の暗黒支配。  明文法を重視する支配（心の動きに重要性を持たせていない）、「絶対不可侵の天皇制」は西洋の一神教がモデルになったもの。 |
| 宗教（その１） | 多神教、万民平等、  精力善用・自他共栄、天敬愛人  仏教、儒教、キリスト教（注）など他宗教の受入れ・共存が可能。中村哲先生のアフガニスタンでのイスラム教寺院建設が有名な話。  人間のプラスの心（正直、利他、思いやり、合理的精神など）を社会に活かし、地上天国の実現を目指そうとする。救世主や偶像への依存がない。 | 一神教、他宗教との共存が困難。選民主義を抜け出せない。  軍産宗複合体、統一教会のような邪教がKCIA（CIAの弟分）によって作られる。  人間のマイナスの心（恐れ、怒り、おごり、虚栄等）を突いて、自分達の為に人間社会を支配しようとしている。人間の弱点（救世主や偶像に依存する心）を利用して、他の人間を支配しようとすることも、このことと重なる。 |
| 宗教（その２） | 神道、アマテラス（太陽、日の丸）  お天道様信仰（人の心の中に存在する良心の声と共に生きる）、創造主との契約など思いも及ばないこと（人は元々大自然の中に抱かれてしか存在し得ない。） | 「天地創造の神」と契約 |

（注）織田信長は当初キリスト教を受け入れていましたが、後に禁教しました。これは、キリスト教の中に野心（奴隷貿易、植民地主義）を見出したからです。江戸幕府はキリスト教を厳禁としましたが、それはキリスト教の中に秘められた野心と、その洗脳に国の存亡に係る脅威を見たからです。江戸時代後期に隠れキリシタンの里が発見されましたが、詮議の結果お咎め無しとなりました。隠れキリシタンのキリスト教は、既に「キリスト教でない」という理由からです。この意味は、仏教や神道とも共存可能なキリスト教であるということであり、200年の時を経て日本の風土が伝来キリス教を多神教的な宗教に変えたということだと思います。

３． 「日の丸」について

　3-1. 「日の丸」が「WAR 日の丸」として悪者扱いにされた、日本人の大反省が必要

第二次世界大戦中に「日の丸」は、戦意高揚のシンボルとして利用され、日本軍侵略の被害にあった周辺諸国の人々から憎悪の対象として見られました。明治維新以降、日本は欧米列強の真似をし、周辺諸国の植民地化を目的に苛烈な侵略戦争を行いました。その結果、日本は欧米列強国と同じ「罪ある国」になってしまいました。このことは、日本がマッカーサーから「１２歳の少年」と言われた通りに、「世界を知らな過ぎる」ことからくる過ちでした。と言っても、それは許されることではなく、今後共日本はその十字架を背負い続けて生きて行くしかありません。元々、「日の丸」は日本精神（日本教）のシンボルであり、権力を持つ武士が恭順の意思を示す対象であったのです。幕末の鳥羽・伏見の戦いでは、薩長軍は「錦の御旗」（黄金色の日輪の下に天照皇太神と書かれたのぼり旗）を掲げましたが、これを見た幕府軍は朝敵になることを恐れ、戦意喪失し、総崩れになったと伝えられています。

　　　第二次世界大戦中の日本軍は、完全に「日の丸」の使い方が間違っていました。それは、日本の国柄に全く相応しくない「侵略戦争」の為に使ったからです。それでも、ケガの功名とも言うべき「日本軍の侵攻がアジア各国の欧米植民地からの独立」に寄与したことは間違いのないことです。しかし、元々日本軍の周辺国への侵攻の目的は、「自国の欲望」の為ですから、日本の国柄と大きな齟齬がありました。従って、このことに日本は大反省をし、決して同じ過ちを二度としないという決意を強固にすべきです。

3-2.今、岸田内閣は米国の注文通りに、国と国民の墓堀を喜々として進めている

　今、岸田内閣は米国の意向に沿って、2022年12月16日に安保３文書を閣議決定し、敵基地攻撃能力の保有と5年間で防衛予算２倍（GDPの２％、４３兆円）化の方針を決めました。また、自衛隊と米軍の一体化を進め、有事の際には自衛隊は米軍の指揮の下に運用されるということであり、これで事実上自衛隊は米軍の奴隷状態になってしまうということです。これは本当に恐ろしい状況ですが、岸田首相は喜々としてこの大軍拡路線を進めようとしています。米国（米軍）の奴隷なることが、自分が生き残るための必要条件だと考えているのでしょうか？しかし、その結果どのようなことが生じてしまうのか？自衛隊は中国との戦争に巻き込まれ、多分日本国と日本国民は大被害を被り、再生不能状態に陥ることになると思います。つまり、日本国と日本民族の消滅です。岸田首相は深い思考が停止状態にあり、サーロー節子さんが述べたように、「岸田首相は、日本国民を初め世界の人々を欺こうとしている」と思います。米国・タイム誌が述べたように、岸田首相は「数十年続いた平和主義路線を捨てて、軍事大国への道を踏み出した」（a）ということです。官邸はタイム誌と交渉して、「平和主義だった日本に国際舞台でより積極的な役割を与えようとしている」（b）という文言に修正して貰ったということですが、結局のところ、（b）もつまるところは（a）であるに過ぎません。「軍事力を持たなければ、平和主義を進められない」というのでは、それは「平和主義を口実に際限のない軍拡競争に陥る」ということであり、軍国主義から離脱することは困難です。

　米国は1776年の独立以来、戦争をし続けており、戦争をしなかった期間が僅か20年と言われています。そんな戦争国家・米国に取り付かれてしまった日本ですが、どうすればわがまま放題のディープ ステート（深奥国家）から支配されている米国から自立出来、日本国と日本民族の存立を確保出来るでしょうか？

3-3. 今、本来の「日の丸」（＝「PEACE 日の丸」）の力を発揮すべき時

この絶望的な状況を転換する方法は、あるのでしょうか？私は、古事記に出て来る「天の岩戸」神話**（補足２）**に着目したいと思います。

　　今の世界は、欧米支配層（＝ディープ ステート）の際限のない欲望に支配された、暴虐と嘘・偽りが支配する暗黒の時代にあると言っても良いと思います。これは、キリスト教で言えば、「神と富の選択」において、「富を選択」してしまった結果だとも言えます。聖書には、「あなたがたは、神と富に兼ね仕えることは出来ない」（マタイ伝6：24）と書かれていますが、両方を選択しようと思ったがそれが叶わず、結果として「富を選択」ということになったのかも知れません。

「天の岩」神話で言えば、ちょうど須佐之男命が乱暴・狼藉を働き、太陽の神・天照大御神が「天の岩戸」に隠れて暗黒の世界が到来した状態だと言っても良いと思います。この状態は、日本が米国（在日米軍）に支配され、殆ど絶望状態にある今の状況に匹敵すると思います

　　　自公政権やそれに同調する維新や国民民主は、米国（米軍）の言われるままになることで生き延びようとしています。しかし、本当に生き延びることが出来るのでしょうか？ウクライナはユダヤ人のゼレンスキー大統領に煽られて、ロシアと延々と殺し合い（戦争）をさせられています。本当に、生か死かの状況にさせられているということです。今、日本が米国（米軍）の意向通りになれば、中国との戦争に引きずり込まれる可能性が極めて高くなります。日本が中国との戦争に参加しなければならない、日本側からみた合理的な理由は皆無です。全ては、いつまでも世界覇権を維持したいという米国側の理由で、日本が殺し合い（戦争）に引きずり込まれようとしています。大手メディアも、SNSも米国（米軍）のチェックや誘導を受け続けられています。世論誘導も米国（米軍）の都合の良いように行われています。何しろ、日本にはCIAだとNSAだの諜報員が1000人以上もうようよして、日本国民を監視し、チェックしながら、米国（米軍）への奴隷化誘導が進められているのですから。「どうする日本国民？」

　　　私は、日本人の心に消滅しかかったDNAを呼び戻し、再生させなければならないと思っています。それは、「お天道様信仰」です。私が物心ついた70年も前に兄姉達に教えて貰ったことがあります。それがお天道様の存在です。「お天道様は全てちゃんとみている。だから、隠れて悪い事をしてはいけない。嘘をついてはいけない。」　今思えば、それは「天の声（良心）に従って生きなさい」ということであり、これこそが日本精神（日本教）の出発点になるものだと思います。しかし、その後いつの間には日本は無宗教の国となり、仏様もキリスト様も八百万の神様も存在する訳の分からない国ということになってしまいました。但し、「訳が分からない」のは西洋人からみた判断基準であり、日本の自然が生み出した日本精神（日本教）は、仏もキリストもマルクスも共に共存することが可能なのです。何故なら、日本精神（日本教）とは、まず最初に「お天道様と私」の関係があり、その関係は「息をする如く密接に繋がっており」、仏もキリストもマルクスも「お天道様と私」の関係を強化するものということになるからです。中村哲先生の「天と共に」という考え方が、典型的に日本精神（日本教）の真髄を表現したものになります。

3-4.具体的な「PEACE 日の丸」の政治活動について

この絶望的な状況にある時に、武力で米国（在日米軍）に立ち向かっても成功しません。テロリストの烙印を押され潰されてしまうだけです。或は、連合赤軍のように内部崩壊して自滅に至ってしまいます。では、どうすれば良いのでしょうか？

「日の丸」（＝「PEACE 日の丸」）の出番だと思います。「朝の来ない夜はない」と言われています。「極東の島国」に天より与えられた使命を果たすべき時です。具体的には、立憲政治勢力は彼らの政治活動時に殆ど全てにおいて、「日の丸」を上着の左胸に付けて実施することです。その効用は、次のようなものです。

1. 立憲政治勢力が、仲間同士であるということを確認し合えることが出来る。今の日本社会は、共産党や共産主義と距離をおこうとする傾向があります。そのもっとも大きな理由は、特に大企業や一般社会では「共産党関係者は差別され、大きな不利益を被る」ことになるからです。また、ソ連崩壊や中国の国家資本主義化により、「共産主義はうまく行かない」ということが日本人の一般的な感覚になっていることもあると思います。ただ、共産主義を根拠にしたものではないと思いますが、共産党関係者が憲法に基づく平和主義（米軍基地拡大反対）や原発反対の行動をとっているのも事実です。つまり、彼らは日本精神（日本教）に合致する行動をとっている人が多いということです。従って、彼らにも左胸に日の丸を付けて貰えば、より仲間同士という連帯が生まれる訳です。
2. そもそも、「日の丸」は日本精神（日本教）を端的に表現したものです。それは、人世の幸せを願って作られたあらゆる宗教や主義を超越し、またそれらのあらゆる宗教や主義を差別しません。
3. また、日本国憲法は日本精神（日本教）を母体に生まれたものです。日本国憲法を大事にする人は、左胸に「日の丸」を付けることで、彼の立場を世に示すことが出来ます。
4. 実際に顕著な効果があると思われるのが、米国に言われて進めている岸田政権の軍拡路線を強く批判することが容易になることです。つまり、自民党や維新の会等は、日本精神（日本教）に反しているとして、彼らを「偽物保守」、「売国奴」、「米国のポチ」、「財界のポチ」として強く厳しく糾弾出来るということです。
5. ＫＣＩＡが作ったと言われる統一教会等、カルト宗教（邪教）を、人世の荒廃を招く元凶として厳しく排除することが容易になります。今の自民党では、統一教会への対応が全く不十分で、統一教会と関係が深かったとされている細田衆院議長や萩生田政調会長は、のうのうと重要ポストを継続したままです。統一教会の解散請求にも尻込みしています。

自民党を「統一教会のポチ」として糾弾することが出来ます。

1. とにかく、**「天の岩戸」神話をモデルに、左胸の「日の丸」を信じて、絶望的な状況であっても楽しく政治活動をしていくことです。事態の好転を信じて。**
2. この「日の丸」運動は、内外の人々の良心を目覚めさそうというものです。例えば、今米国では2024年大統領予備選に民主党のロバート・Ｆ・ケネディ・ジュニアが出馬を表明しています。彼は、海外の800もの米軍基地を閉鎖すると言っています。ディープ ステートに支配された欧米世界を大きく変えようとする人が現れたということです。「日の丸」運動は、彼のような良心的な人の輪をより大きくしていこうとするものでもあります。
3. 大事なことは、「左胸に日の丸」運動は、最初から武力闘争を放棄しているということです。西洋の弱肉強食思想ではなく、東洋的にガンジーに学び、「祈りと信念」の活動に命運をかけるということです。出来ることをしっかりと行い、理想社会の到来を信じていくという運動です。

　　3-5.自民党や維新の会の「日の丸」と区別がつかなくなるのでは？という疑問に対して

　　　　基本的には、対米従属の自公政権等に反対する立憲民主党・共産党・社民党やれいわ新選組の街宣において、参加者が日の丸を左胸に付けようという運動ですので、大丈夫だと思います。それに、「日の丸」の四隅に、「平和」、「民主」、「人権」、「万民平等」と言った日本国憲法の原則を記した、文字通り「PEACE 日の丸」とする方法を採り、「対米従属」脳へと洗脳されてしまった自民、維新などの「日の丸」と区別することを考えても良いのです。

　　　　　反軍拡、反原発、反カジノ等、ＤＳ支配政治を終わらせて、日本精神（日本教）（＝日本国憲法）に基づく人同士が助け合い・支え合う社会を建設していこうという主張が最初にありますので、自公や維新とかぶることはあり得ないと考えても差し支えないと思います。**「PEACE日の丸」が放つ光は、対米従属意識を除去し、人としての心を取り戻すための最強の武器になり得ると思います。**

４．今の時代に対する正しい処方箋を出すために１６世紀以降の歴史を振り返る

4-1．衝撃的な歴史

戦国時代の1549年に、キリスト教はフランシスコ・ザビエルにより日本（鹿児島）に初めて伝えられました。キリスト教布教に関して、スペインのキリスト教会で数百年に亘って極秘扱いされていた書類ついて、2020年7月NHKにより放送され、公開されました。この極秘書類の公開は、日本史の歴史を書き換えなければならない程、衝撃的なものだと思います。

その書類の内容とは、**『宣教師達がキリスト教を布教する目的は、日本をキリスト教国化して、日本をスペイン国王に仕える国（植民地）にし、更に日本の軍事力を使って中国を侵略するためである』**というものです。

本来、キリスト教は「愛の宗教」であり、「人類救済の宗教」です。イエス・キリストの言葉は、「福音」として人々に人類救済の良き訪れを告げています。しかし、その聖なる福音に、差別主義や自己中心主義を内包した植民地主義を潜ませていたのは他ならぬ西洋のキリスト教会だったのです。そして、南北アメリカ大陸やアフリカ大陸の原住民に対して「愛の宗教」の宣教を進める裏で、彼らを奴隷化したり、彼らの国々を植民地化したりしました。アジアの国々にも同様なことをしようとしましたが、16世紀から17世紀の東アジアの国々は、中国初め日本も文化的にも軍事的にも強固であり、西洋の支配に陥ることがなかったということだと思います。

そして、徳川幕府による鎖国は、西洋の野望から日本を守る「究極の日本防衛策」でした。徳川幕府時代の265年間、日本は国内の藩同士で戦争をしない「平和日本」を達成しました。つまり、西洋の影響を遮断することで、日本は「憲法９条」が機能する社会を確立することが出来たということです。

しかしながら、西洋は科学技術を進歩させ、大量の人を殺害する武器を手にすることで、東洋を侵略する軍事力を獲得しました。日本はペリーの黒船来航（1853年）等の開国圧力を受け続けたため、不平等条約を締結し開国を受け入れざるを得ませんでした。そして、1868年に明治維新が始まり、日本は西洋の科学技術や西洋思想・宗教をも吸収し、不平等条約を解消するために富国強兵を進めました。そのスピードが極めて速かったため、西洋列強は日本を他のアジア諸国と同じような植民地にすることは出来ませんでした。しかしながらその際、日本は西洋の悪い面をも学んでしまいました。それは、エゴイズム（植民地主義）です。朝鮮や中国等周辺国に対して、西洋と同様に自己中心的な侵略を行い、戦後77年を経た今もその傷を癒すことが出来ずにいます。

日本が第二次世界大戦に巻き込まれてしまったのは、老獪な西洋諸国に比して、いみじくもマッカーサー元帥が述べたように、世間知らずの12歳の少年だったからです。ルースベルト大統領は、日本が真珠湾を攻撃したことを小躍りして喜んだと、英国人が書いた本の中に書かれていました。米国民に「対日戦争気運」を盛り上げることが出来るためです。

衝撃的なのは、16世紀中頃始まった西洋による東洋支配戦略が今も続いているという実態です。今の西洋とは米英を中心とした諸国ですが、彼らは世界覇権を中国に渡さない為に、日本と中国を戦争させて両国を疲弊させるあからさまな方針を持っています。つまり、**16世紀中頃の宣教師達と同じ思いを、今の欧米（支配層）も持っているということです。**

江戸時代初めは、キリスト教を禁教にすることで西洋の侵略を防ぐことが出来ました。しかし今、キリスト教もマルクス主義も日本的価値観に取り込むこと、即ち西洋を吸収することによって、侵略される立場を脱却するしかないように思います。**つまり西洋的価値観から見れば、本来交わることが不可能な唯神論と唯物論も、日本的価値観により共にその立場を両立させることが出来るということです。**

何よりも明確にしておかなければならないことは、16世紀以降の歴史を振り返ってみる時、島国・日本は元々平和国家志向であったということです。これは、前立憲民主党代表の枝野幸男氏が、その著作「枝野ビジョン」で示された歴史認識と同じです。**秀吉の朝鮮出兵も、明治～昭和初期の周辺国への侵略も、全て西洋に触発されて（西洋を真似て）行いました。つまり、西洋には真似たらいけないものがあるということであり、それを明らかにすることが今後の時代への指針を得るために必要なことになります**。

我々の祖父の時代、日本は日露戦争（1904～1905）に於いて、アジア人として初めて白人帝国に勝利したと浮かれました。しかし、この勝利は、米国のユダヤ人大富豪のジェイコブ・シフらに戦費の４割の上る戦時国債を引き受けて貰い、そのお金で英国製の武器を購入することが出来たからこそ成り立ったものです。そして、その借金の返却は、太平洋戦争中は一時途絶えたものの戦後も継続し、何と1986年のバブル絶頂期まで続いていたのです。つまり、ジェイコブ・シフは自分の孫の代まで、日本からの提供資金回収を計画していたことになります。逆に日本側から見れば、戦争に勝ったものの、その後80年以上に亘って子孫にその戦費を負担させることになってしまったということです。このことだけを見ても、欧米諸国に煽られて、絶対に戦争に参加してはならないということを強く胆に銘じなければなりません。

4-2．第二次戦後の本当の歴史も、実は衝撃的

1945年の敗戦から77年間の歴史を考えると、米国（支配層）は実に巧妙に日本の植民地化を進めてきました。

まず、国政の根幹となる日本国憲法の草案作成にケーディス氏（ＧＨＱ憲法草案担当者、当時39歳）や、両性の平等を起草したベアテ・シロタ・ゴードン女史（当時22歳）等の優秀なユダヤ人達が、僅か９日間で作り上げたものです。改憲派の中には、外国人が係っていたので問題だという人々がいますが、そのような人々に限って、欧米勢力の意向のままに動いて、日本を先進国から没落させています。むしろ、優秀なユダヤ人が係ったことで、日本国憲法を世界基準にまでレベルアップすることが出来たというべきです。ただ、それは極秘のうちに行われており、一般の日本人がそのことを広く知ることになったのは、第二次安倍政権時代の2013年以降ではないかと思います。

日本国憲法の理念である民主・人権・平和に基づく国造りにより、軍国主義国だった日本は大きく様変わりし、非常に速いスピードで経済的にも社会的にも再生しました。まず、敗戦から僅か19年（1964年）で、アジアで最初にオリンピックが出来るまでに奇跡の復興を果たしました。そして、敗戦後23年の1968年には世界第２の経済大国にまで成長し、1985年にはＧＤＰが米国の70％にまで迫りました。この時期、一億総中流社会と言われ、日本は格差の少ない理想的な民主国家、或は社会主義的な国家だと言われていました。また、東京は女性が夜に独り歩き出来る、世界で最も安全な大都会と言われるまでになりました。これは、日本の長い歴史の中で、仏教等の影響により日本人の道徳心が高いレベルに維持されてきたからだと言えると思います。正確には、明治時代までに培われてきた道徳心が、昭和初期には軍部を中心とする指導層レベルで大きく毀損されてしまいましたが、庶民レベルでは戦後社会にまで引き継ぐことが出来たということだと思います。この時代を経験した団塊の世代を中心に、多くの人が「米国は軍国主義社会を終わらせ、民主主義を日本にもたらしてくれた国、民主主義の兄貴分」として尊敬の気持ちを抱くようになり、親米人間になっていきます。私自身もほんの10年前まではそのような親米人間だったのです。

しかし、1985年以降の日米関係、米国のイラク戦争やアフガン戦争に接し、更に３年間の民主党政権や、その後10年間の安倍・菅政権の様子に接し、米国に対する考え方を大きく修正せざるを得なくなりました。米国の政治は、民主党であろうと、共和党であろうと、実際の政治を動かしているのは、グローバル金融権力と軍（諜報機関を含む）が結び付いたディープ ステートではないかということです。そして、1985年以降の米国の対日政策は、新自由主義の押付け、規制緩和政策、民営化促進等を通じて、日本社会の劣化や日本的なものの消滅を狙っているように思います。つまり、日本をより完全な対米従属国家（米国の植民地国）にしようとする動きが強化されたということです。

これらは、日米合同委員会やＣＩＡ等の諜報機関**（補足３）**を使って、政治家や官僚、マスコミ等日本社会のあらゆる組織に対する洗脳活動を通じて、日本人が日本人の手で日本人自身を縛るような形で行われて来たように思います。

つまり、敗戦から1985年までは「米国は良い国」という意識を植え付け、信用させ、その後本性を顕し、「日本を植民地化する」という大変恐ろしい状況が、今だと思います。

日本企業の没落ぶりはすさまじく、バブル期の1989年には20位以内に14社がありましたが、現在では上位100位以内に日本企業は２社のみ、トヨタ（29位）とソニー（92位）だけです。

1990年代初頭のバブル崩壊からの三十数年間は、日本衰退の三十数年間です。例えば日本の賃金はほぼ横ばいですが、韓国では1.9倍へ上昇し、今は韓国に追い抜かれてしまった状況です。そして、韓国の一部世論では、このまま自公政権が続いて日本が益々没落してくれた方が良い、日本に増々差を付けることが出来るというものまで出てきています。

4-3．今の日本は悪魔の支配下にある

4-3-1．日本は米インド太平洋軍に植民地支配されている

矢部宏治氏著「知ってはいけない」という本（講談社現在新書）の中で、彼は次にように紹介しています。

あのブッシュ政権の国務長官だったコンドリーザ・ライスさえ、日本と韓国に軍をおくアメリカ太平洋軍について、次のように述べているのです。

「太平洋軍司令官は昔から植民地総督のような存在で、最もましな時でも外交政策と軍事政策の境界線を曖昧にしてしまい、最悪の場合は両方の政策をぶち壊しにしてしまう傾向があった。誰が軍司令官になろうが、それは変わらなかった。これは太平洋軍司令官という役職にずっと付きまとっている問題だろう」（『ライス回顧録 』集英社）

　つまり、**「戦後日本」という国は、実はアメリカ政府ではなく、アメリカの軍部（特にかつて日本を占領した米極東軍を編入した米太平洋軍）に植民地支配されているということです。**

ライス氏や矢部氏のこの認識を証明するような事態が、つい先日起こりました。林芳正氏は、2021年11月11日午前中に外務大臣に就任しました。そして、その午後にアクイリノ米インド太平洋軍司令官の約20分間の表敬訪問を受けました。テレビで放映された状況では、アクイリノ司令官に笑顔はなく何か睨みつけるような感じで、林外務大臣はぼそぼそとメモを小さな声で読み上げていました。林氏は「日中友好議員連盟」の会長だった人で、親中派議員のまとめ役と言ってもよい人です。私には、アクイリノ司令官が林外務大臣に、「中国と親しくするなよ！」と脅しをかけているように見えました。そもそも、何故外務大臣が就任早々、米軍司令官の訪問を受けなければならないのでしょうか？

「日米合同委員会」の米側代表は、在日米大使館公使一人の他、在日米軍関係者が６名も出席します。日本側代表は、外務省、防衛省等の局長クラス６名です。つまり、ここで在日米軍が日本側官僚を直接指示・支配する構図が出来上がっていることになります。しかも、「日米合同委員会」の議事内容は非公開であり、日本の有権者が知ることが出来ません。**「日米合同委員会」が、国権の最高機関である国会の上位に実質的に存在する限り、本当の民主主義国家は決して実現出来ません。**

また、どのような軍でも、シビリアンコントロールをはみ出して、「ワガママ」になろうとする傾向があります。それが米国本土から遠く離れた日本にあるため、在日米軍は米国政府のコントロール枠を超えて、米国政府要人が問題と思う程に、「ワガママ」になっているということだと思います。そして、在日米軍の「ワガママ」な意向は、「日米合同委員会」を通じて日本のあらゆる分野に、政策として波及する仕組みが出来上がっているのだと思います。

4-3-2．原発問題

原発は、読売新聞社社主であった正力松太郎（日本の原子力の父）らが、CIAの関与を受けてその導入を進めたと言われています。1957年当時、日本人初の[ノーベル賞](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%8E%E3%83%BC%E3%83%99%E3%83%AB%E8%B3%9E)受賞者である[湯川秀樹](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%B9%AF%E5%B7%9D%E7%A7%80%E6%A8%B9)は、原発導入に反対で、抗議の意思もあり、原子力委員会・委員を辞任したと言われています。60年以上が経過した現在、[湯川秀樹](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%B9%AF%E5%B7%9D%E7%A7%80%E6%A8%B9)の抗議の思いが「大正解」であったことが明らかになりました。福島第一原発の大惨事だけではありません。原発を運転するだけで、原発勤務者だけでなく、原発周辺の住民に放射能をまき散らし、白血病などの疾病を広げています。原発の廃炉には70年と言われる年月を要し、莫大なコストがかかります。更に、核廃棄物の処理に付いては、気の遠くなるような話です。テロ然り、戦争にでもなり原発が爆撃された時、最早「国破れて山河が無し」となってしまうのです。それでも、原発に固執する自公政権、何故でしょうか？目先の利益だけでしょうか？岸田首相は、2021年の自民党総裁選挙の時に、「プルトニウムを減らさなければならないという米国の意向がある」と述べていました。「米国支配層の意向」を断ることが出来ないというのが、その最大の理由です。

　福島第一原発の大惨事後に、当時民主党の長島昭久議員と大串博志議員が「原発ゼロ」を実現したいとオバマ政権に申し入れに行ったそうです。そうすると、「プルトニウムの処理はどうするのだ」と言われて、すごすごと帰ってきたということです。一方で、バイデン副大統領（当時）は、「日本は一夜にして原爆を作れる」と言って、日本脅威論をアピールするような状況なのです。

原発を日本に押し付けて、その生産物であるプルトニウムが出たら、そのプルトニウムを理由に「日本は原爆を作る危ない国」とアピールする。そして、「日本は危ない国であるから、在日米軍が必要」と述べる。（ビンの蓋理論）これは、もはや「悪魔の所業」と言わざるを得ません。

　4-3-3．欧米人のおぞましいアジア人蔑視

西日本新聞の2020年9月26日一面に、“「在日死ね」社内教育 3世、子と苦悩の日々”との記事が掲載され、会社ぐるみの「在日差別行為」が報道されました。中韓ヘイト世相を煽ったのがアメリカ人男性のケント・ギルバート氏（当時68）であり、彼は「日本を礼賛し、中国や韓国を厳しく批判する本」を出版しています。その目的は、「自虐史観に洗脳された日本人に自信を持たせ、日本を明るくすること」らしい。そして、彼の本に影響された日本人が、「中韓への偏見を増長」させています。「中韓への偏見を増長」させた日本人に対する彼の見解は、「それは日本人が差別的な民族だということだ」そうです。何か？おかしくないでしょうか？ヘイトを煽っておいて、それに影響された日本人が出た場合、『それ見たことか！日本人って差別的な民族だ！』つまり、彼の真意は中韓に対するヘイトだけではなく、日本人を含めた「アジア人蔑視の底意」が隠されているのではないか？ソフトバンクの孫さんや王さんの活躍を見れば、在日ヘイトが間違いであるのは自明です。

おだてておいて、奈落へと突き落とす。前項の原発問題でも似たようなものです。欧米各国による「戦争への誘導」のやり方も、同様です。日本も他のアジア諸国と同様に、欧米人や欧米各国の下心（悪魔の所業）に気付かなければ、日本を未来へと繋ぐことが出来ません。

５．日本文化とディープ ステートを生み出した西洋文化について

5-1．日本文化、ユダヤ教・キリスト教について知る

　　私は、日本文化やユダヤ文化の専門家ではありません。ただ、10代後半に新約聖書を読んだことをきっかけに、30代後半位まで内村鑑三の流れを汲む無教会キリスト者やプロテスタント系の日本キリスト教団関係者との交流を持っていました。また、30代後半から50代半ばまでは、社団法人・倫理研究所**（補足４）**の一会員となり、日本や日本文化を肯定的にみる視点を養いました。そう言うことで、日本文化やキリスト教（ユダヤ教）については、一般日本人の常識にプラスαした位の知識はあるかも知れませんが、あくまで素人に過ぎません。そのような知識ではありますが、日系ユダヤ人であるイザヤ・ペンダサン氏著作「日本人とユダヤ人」の記述内容をも助けにしながら、考察を進めます。

イザヤ・ペンダサン氏によれば、神とユダヤ人との関係は、ユダヤ人が「あなたを私達の神とします」という契約を結ぶことにより成立しているということです。聖書の中にも、「我が神は言われる」（例えば、出エジプト記20-1）という箇所が、度々出てきます。また、「わたしは、ねたむ神」（出エジプト記20-5）という言葉さえあります。つまり、人が神を捉えているということです。

それに対して、日本人は神というものをどのように捉えているのでしょうか？前述の倫理研究所が、教科書として発行した「万人幸福の栞」の中には、次のような文章があります。

『宇宙の生命、統一の中心、万象の根源、これを神あるいは仏という。民族により、宗教により、色々と名称は異なり、見方は違っているが、ただ一つの宇宙の統一力、支配者、主宰者をいうのである。しかし、神は幽なるもの、説明を超え、思惟を絶する、感覚の外にある。言いようもなく、考えようもない。絶対と言い、無限と言うも、光明無量又寿命無量、そうした言葉の末で、その真を尽くし得るものではない。言えばすでにちがう。考えれば、もうこれとはなれる。』

つまり、神という存在は、人が捉えることが出来ないと、認識しているということです。しかし、全く「神を感じる」ことが出来ないというかと言えばそうではありません。

上記に続く文章は、次のようなものです。

『万象は神の発顕、世界は神の顕現、人は神の性をうけて現れ、あたかも天界での星の如く、小宇宙をなし、小中心をなして、その各々の境に於いて主位に居る。すでに、幽なる力が現れて万象となり、形をとった力は、ひそんで幽界に統一する。故に幽顕一体であり、神人不二である。この理を実にしたもの、これを神人合一、解脱、見神等と名づける。』

つまり、元々神と人は切っても切れない関係であり、これを修行等により体得した状態が神人合一、解脱、見神等と表現されるというものです。

そして、**日本文化の本質は修行等によって神人合一、解脱、見神の域に達し、神即ち創造主（大自然）からの恩恵を、人間界にもたらすことにあります。**日本文化に見られる様々な「･･･道」は、その恩恵が一つの枝として顕在化したものということです。

何故、そのような日本文化が生まれたか？それは、ひとえに日本が置かれていた地理的位置と風土にあります。周囲を海に囲まれ、異民族からの支配を防ぐことが出来たため、異民族から略奪されたり、破壊されることが殆どありませんでした。また、四季があり、その季節に応じて勤勉に働けば、土地は自然の恵みを生み出してくれます。更に、日本国内の平和を乱さない為に、中国や朝鮮から伝来した仏教・儒教などの教えや日本古来の「お天道様」信仰をベースにした道徳律が全ての階層に行き渡ることになります。それは、勤勉、正直、公正、孝行、忠義、他者に親切にすること等を奨励し、それらに基づき生活することを、「徳を積むこと」としました。そして、この「徳を積むこと」が「幸せにつながる」、いわゆる「徳福一致」の考え方が広く民衆の間に根付き、ともすれば陥り易い人間のワガママから派生する様々な不正、圧政、暴虐を抑える防波堤になっていたものと思います。

つまり、日本民族は、ユダヤ民族のように神から「十戒」というような道徳律を直接与えられなくても、恵まれた環境の中にあったため、「徳福一致」という道徳律を自然に身に付けることが出来たと言えます。そして、それは目に見えないグレート・サムシングへの信頼を強固なものにし、その信頼の最終的な到達点が、「本もの天皇制」ということになります。日本人のみが、何故、「朝廷・幕府併存」（つまり「本物の天皇制」）を実現することが、出来たのでしょうか？それは、グレート・サムシングへの信頼を育んだ日本の地理的条件と自然環境があったからとも言えます。**日本文化の最大の特徴は、それが、神も仏もある世界に存在するということだと思います。つまり、「正しい努力」をすれば、神や仏の恵みを受けて「報われる人生」を送ることが出来るという世界観であり、人生観です**。

「正しい努力」とは何でしょう。日本人は、それを「心の持ち方」にあると学びました。「他人が見ていようが見ていまいが正直に生きなければならない、お天道様は見ておられる」、「嘘を付くと、他人は騙せてもお天道様は騙せない。何より、お天道様より生を受けている自分自身を騙せない」、「嘘は泥棒の始まりで、嘘をつくような人はろくな生き方が出来ない」というようなことを、実体験で習得しました。また、「天の岩戸の物語」に見られるように、多くの人々が集い、歌や踊りで楽しく和気あいあいと過ごしていると、暗黒の世界は過ぎ去り、光明の世界が訪れるということも経験則で学びました。即ち、「正しい心」を持って過ごすことが、グレート・サムシングからの恵みを得る「必要条件」であるということです。

しかしながら、遊牧を営む大陸文化は、そうはいきません。遊牧民は他部族、他民族を略奪することを生業としてきたからです。戦争をしかけ、他部族、他民族の富を根こそぎ奪い、そして征服した民を奴隷としてしまいました。逆に戦争に負ければ、彼らの富は根こそぎ奪われ、彼ら自身が奴隷にされるという憂き目をみることになります。彼らは、弱肉強食の神も仏も感じることが出来ない世界で、生きてきたと言っても良いと思います。戦争に敗北すれば、彼らの全財産を奪われるばかりか、殺されたり、或は奴隷にされてしまうのです。神や仏の恵みを見出すことが不可能な、不条理の世界です。

現在文明を切り拓いたヨーロッパの歴史は、基本的には略奪文化である遊牧文化がその根底にあると考えても良いと思います。ドレイ制度、植民地主義は、そのような略奪文化から生まれたものであることは間違いありません。

このような略奪文化の世界に神を見出したのが、世界で最も頭の良いユダヤ民族です。彼らは、彼らが信ずる神と「十戒を守るという契約」を交し、その契約を守ることで、その神の民となり、その神の庇護を受けているという自覚を持つに至ります。

「神と契約を結ぶ」ということは、「神を捉えたということ」ですが、神を感じることが出来ない境遇にある彼らが、「神の民となり、それにより神を感じることが出来る唯一の方法」だったのかも知れません。

また、略奪社会においては、その神が自分達を守ってくれることが、何よりも大切なことになる訳です。従って、どうしても自分達の神ということになり、略奪する敵を利する神であっては困る訳です。そのような事で、彼らの神は彼らだけの神であり、略奪社会の中で彼らを頂点に押し上げるための神でもあるのです。

しかしながら、ここのところが、日本人の神に対する意識と最も違うところです。日本人にとって、人間とは元々神や仏の懐に抱かれている存在であり、「人間が神を捉えることは不可能」だと認識しています。この日本人の神認識を実にしたものが、「日の丸」だとも言えます。つまり、太陽です。人類が如何に進歩したところで、太陽を征服する（捉える）ことは不可能です。また、太陽の恵みにより、人間を含めた地上の全ての生物は生きていくことが出来、存在することが可能です。太陽の恵みが無ければ、そもそも全ての地上生物は存在出来ません。日本民族が太陽（アマテラス）を神の一つの象徴と考えたのは、そのような理由からだと思います。日本人の神意識は、人間が太陽の光（恵み）を感じることが出来るように、人は様々な修行等により、神や仏に抱かれている自分自身の存在を感じることが出来るというものです。

どちらが正しいか、正しくないかは別にして、これが客観的な事実だと思います。

ところで、「契約の神」を信じるユダヤ人の中から、2000年もの昔、一人の宗教的大天才（預言者）が現れました。言うまでもなく、イエス・キリストです。彼は、神のことを「天の父」という表現をし、自分のことを「人の子」という表現をしました。人間として生まれた彼が、神のことを「天の父」との表現をし、「神と人とは父と子のような関係である」と言いました。神（父）の心を実践すれば、神（父）と契約を交わし神（父）の義理の民（子）にならなくても、神（父）の本当の子になることが出来ると述べました。イエス・キリストは、それまでユダヤ人が神としていた「契約の神」を超越する「本当の神」という存在を、当時のユダヤ人社会に伝えました。私は、イエス・キリストの神に対する認識と日本人の神に対する認識は、多くの点で同じであると思います。その大きな共通点は、「心の動き」を重要視している点です。

『“姦淫するな”と言われていることは、あなたがたの聞いているところである。しかし、私はあなた方にいう。だれでも、情欲をいだいて女を見る者は、心の中ですでに姦淫をしたのである』（マタイ伝5-27～28）は有名な聖句ですが、現在人には厳し過ぎるものです。しかし、それは、「心の動き」が重要であるということを示している典型的な例だと思います。

『捨我得全』は、前述した「万人幸福の栞」の中で述べられている言葉です。

これは、『窮地に陥った時にも、恐れ、怒り、急ぎ等の私情雑念をさっぱりと捨てて、運を天に任せる明朗闊達な心境に達した時、必ず危難を逃れることが出来る』という意味です。これも、「心の動き」の重要性を述べたものであることは、間違いありません。

つまり、両者共、「正しい心の動き」が無ければ、「罪を犯すこと」になったり、「神の恵み」を得ることは出来ないということを述べています。

神がユダヤ人に与えた「十戒」の一番目は、「私（ヤウェ）の他に神があってはならない」という戒めで、これが、ユダヤ民族の第一のアイデンティティということだと思います。そして、十番目が「隣人の財産をむさぼってはならない」です。

問題は、一部のユダヤ人が、ユダヤ人の信じる神を信じない異教徒を、「隣人」だと認めていないことです。殆ど全ての宗教において、「金を貸した時、利息を取ってはならない」という決まりがあるそうです。ユダヤ教にもその教えがあり、キリスト教もイスラム教も同様の教えがあります。つまり、ユダヤ教から派生した全ての宗教は、今の資本主義を否定しています。それを、ユダヤ人はどのようにクリアーしたのでしょうか？彼らは、“ユダヤ人に金を貸した時には利息を取らないが、異教徒に金を貸した時には利息を取る”という方法で、資本主義を成立させました。彼らは、第一番目の戒めを守りヤウェの民となり、自らを選ばれた民（選民）とし、異教徒との間に高い壁を作ってしまいました。略奪文化の中で生きるユダヤ人の一部は、異教徒の富を略奪対象としてしまいました。ヨーロッパに流浪したユダヤ人の一部は、強大となった国の支配層に取り入り、その国の黒幕となって、陰でその国を動かすようになります。彼らは、国同士を争わせ、当該国に資金を貸付、その資金を利息と共に回収することにより、莫大な富を蓄積することとなります。しかし、大富豪となったユダヤ人は一部であり、多くは貧しい農夫等として暮らしていました。狂気に支配されたヒットラーは、国民の不満を金持ちユダヤ人に、更に拡大してユダヤ民族全体に向けさせ、人類史上最悪なジェノサイドを実行し、ドイツ帝国支配地域の裕福なユダヤ人以外のユダヤ人の皆殺しを図りました。（裕福なユダヤ人は財産提供を条件に支配地域外に逃げることを許可）これは、僅か77年前に行われていたことです。麻生副総理は、そのことを「動機は正しくても、やってはならないこと」と言って物議を醸しましたが、これこそ「神も仏もない世界」であり、「地獄の世界」です。日本民族が長い年月をかけて身に付けてきた「徳福一致」の世界観など、吹っ飛んでしまう恐ろしい世界なのです。

5-2．「日本精神」の深掘り

キリスト教徒であった中村哲先生は、まさに「日本精神」を実践した人です。先生は、「キリストの教えは、「日本精神」を強化すると共に、「日本精神」の実践における助けになる」ということを体得されたのではないでしょうか？多分、先生は「自分にとってキリストの教えは必要であった、アフガンの人々にとっても心の支えになるイスラム教は必要である、アフガンの人々のためにイスラム教寺院を建設しよう」と思われたものと思います。**「日本精神」とは、人の善意を根底にして生まれた、どんな宗教やイデオロギーも排除しないで、それらの宗教やイデオロギーの良い所を感知出来、且つ、それを自分のものにすることが出来る「大自然」から生まれた広大な精神と言えるかも知れません。**

ロシアのプーチン氏は、欧米や日本のマスメディアによって「独裁者」のイメージを植え付けられていますが、柔道を通じて「日本精神」を体得した素晴らしい政治家だと思います。安倍晋三氏に期待して27回もの会談を重ねましたが、安倍晋三氏の「日本精神」の本質が単なる「対米従属」であることを知り、さぞかしがっかりしているのではないかと推定しています。2022年2月24日のロシアのウクライナ侵攻は、非難されるべきことです。しかし、米国ＣＩＡ等が養成したウクライナ民族主義者によるロシア系住民に対する迫害、特に東部ウクライナの凡そ15000人にも及ぶロシア系住民虐殺がプーチン氏決断の原因になっていると思います。日本を含む西側メディアは、意図的にそのことに触れませんが、プーチン氏を追い詰めたのは、間違いなくオバマ政権であり、バイデン政権なのです。彼らの目的は、プーチン氏の排除であり、ロシアの国と文化の消滅です。このような状況で、西側諸国とウクライナ側に正義が存在するのでしょうか？私は、中国の仲裁に期待したいと思います。

　 内村鑑三（1861年～1930年）は、日本のキリスト教思想家・文学者・聖書学者です。

　 福音主義信仰と時事社会批判に基づく日本独自のいわゆる「無教会主義」を唱えた人として有名です。「無教会主義」は、彼のアメリカ留学時代（1884年11月～1888年5月）に、キリスト教国・アメリカの社会が、実は拝金主義に汚染されていたという現実への失望が端緒となって生まれたものです。そのようなことで、「無教会主義」は日本独自のもので、「武士道キリスト教」とも呼ばれています。事実、内村鑑三が愛した（信仰していた）のは二つのＪだと言われており、それはキリスト（Jesus）でありJapanなのです。つまり、彼の中では「キリスト教信仰」と「日本精神」の共存が可能だったことになります。それにはまず、彼がキリスト教に触れる以前に、彼の中に「日本精神」が培われ、存在していたからに他なりません。

私は、資本論もマルクス主義の本も読んだことがありません。共産主義の難しい理論等、さっぱり分かりません。しかし、日本の共産主義者が、マルクス共産主義に接した時に、内村鑑三がキリスト教に接したと同じようなことが起きたのではないかと推察しています。つまり、「共産主義」と「日本精神」の共存です。ある意味、日本の共産主義者は一般の日本人よりも、「日本精神」を強く持っている場合が多いのではないかとさえ感じます。「強きをくじき、弱きを助ける」これは、日本の伝統的な道徳的観念だったのです。私が子供の頃の60年前は、社会におる一般的な価値観でした。だから、今のように、弱い子にいじめが集中するという陰惨ないじめは、殆ど見られなかったです。富裕層や大企業に応分の負担を求め、その財源で弱者を救済するという日本共産党、まさに日本の伝統的な価値観を引き継いでいるということになります。

　資本主義の弊害により生じた不平等さ、労働者階級の生活の苦しさを見た時に義憤を感じていたが、それを解消する手段として、たまたま接した共産主義思想に傾倒していったというプロセスではないかということです。この場合、義憤を感じたのが「日本精神」であり、共産主義思想自体が義憤を感じさせたのではないということをよく理解しておく必要があります。そのような意味で、日本の場合の共産主義者、とりわけ戦前・戦中の共産主義者は、「武士道共産主義者」である場合が多いと考えても良いと思います。

　2021年11月24日に福岡市の市民センターで、凡そ350名の聴衆を集めて、れいわ新選組代表・山本太郎さんのおしゃべり会が実施されました。その時、20代位の若い男性が『れいわの国債発行と財政出動は素晴らしいので実現して欲しいと思うけれども、裏があり、例えば米国などの海外からの阻止圧力があったりしませんか？』との質問をしました。

それについて、山本太郎代表の回答を聞き、ここにこそ山本太郎氏の本質があるとの思いを強く持ちました。『当然あるでしょう。財務省とか米国とかが横やりを入れることが考えられます。日本は事実上、米国の植民地ですが、この国のオーナーは皆さんです。資本家に対峙することが出来るのは、この国のオーナーでしかない。この国のオーナーが決めるのだから、資本家もオーナーに従うべき』というようなものです。

山本太郎代表は、「日米関係の現状をよく理解している、そして日米関係を正常なもの　（＝対米自立）に変更するためには、戦後に米国から学んだ民主主義に頼るしかない」とい　うことを、心底理解しているのだと思います。その意味で、彼は”戦後の民主主義教育により育った申し子”と言っても良いと思います。

山本太郎代表は、「人間社会を破滅させる原発や格差を拡大させる消費税」に強く反対しています。これは、この世の中に存在する不条理に対する強い義憤から来ているものであり、「日本精神」の発露に他なりません。新撰組は、幕府の良いところ（つまり、日本文化の良いところ）を、次の時代に残そうとして結成されました。れいわ新選組の名前の由来は知りませんが、山本太郎代表は演技で新撰組の役をしたことがあるそうです。何か、新撰組に共感するものがあったのかも知れません。

　5-3．西洋の不完全さを知り、「日本精神」により西洋を昇華させる

明治維新以降、日本に西洋の文化・思想が色々と入ってきました。そして、欧米列強による植民地化を逃れるため富国強兵政策を進めましたが、それと共に西洋文化・思想も吸収してきました。敗戦後は、欧米の民主主義・人権思想を、日本本来の文化・精神と親和性を保ちながら、日本の国柄にまで成長させました。しかしながら、1985年以降の日本を見ると、欧米支配層による日本の植民地化が、極めて顕在化しないような形で押し付けられてきたように思います。このことは、西洋の文化・思想が大きな問題点を内蔵し、それを脱却しないまま現存していることを意味します。今やっと、その事にかなりの日本人が気付き始めました。

江戸幕府は鎖国することにより、西洋の野望を排除することが出来ました。しかし、今は無理です。逆に西洋文化・思想を「日本精神」により昇華することにより、「東洋（日本）も西洋」も「共存共栄の道」に至る以外にありません。**キリスト教も共産主義も社会主義も、全て「日本精神」により昇華させるということです。**

130年以上の昔、内村鑑三は、キリスト教国の米国社会が実は拝金思想に汚染されている実態を知り失望しました。「日本精神」を持つ内村鑑三である故に、この米国の矛盾を鋭く感知出来たものと思います。この状況は、今も変わっていないどころか、むしろ酷くなっています。岡倉天心は「アジアは一つ」と言って、日本文化が西アジアから東アジアにかけて流れてきた文化を、奥深く受け止めて形成されたことを認識していました。人類生存のためには、22世紀は「脱亜入欧」ではなく、「脱欧入亜」の時代にし、日本文化の中に秘められたアジアの英知を生かしていかなければなりません。

　5-4．「朝廷・幕府併存」は「日本精神」が政治体制として形になったもの

　日系ユダヤ人であるイザヤ・ペンダサン氏は、1970年に「日本人とユダヤ人」（山本書店）という著書を世に出しました。**（補足１）**この本の中で、同氏は、約７００年続いた武士の時代の「朝廷・幕府併存」という日本の政治体制を、日本人のみが行い得た政治上の一大発明と述べ、日本人のことを政治的天才であると、下記のような最大限の評価をしました。

『朝廷・幕府の併存とは、一種の二権分立といえる。朝廷が持つのは、祭儀・律令権と言うべきもので、幕府がもつのは行政・司法権と言うべきものであろう。**祭儀権と行政権は、分立させなければ独裁者が出てくる。**この危険を避けるため両者を別々の機関に掌握させ、この二機関を平和裡に併存させるのが良い、と最初に考えた人間は、ユダヤ人の預言者・ゼカリヤ（紀元前6世紀後半）であった。近代的な三権分立の前に、まず、二権の分立がなければならない。二権の分立がない所で、形式的に三権を分立させても無意味である。

それが如何に無意味かは、ソヴィエトの多くの裁判を振り返ってみれば明らかであろう。西洋の中世において、このことを早くから主張したのはイタリアのダンテである。

彼は、この二権の分立を教権と帝権、即ち法王と皇帝の併存という形に求めた。この両者が車の両輪となって、新しい帝国が運営されるべきであると考えた。だが、ダンテの夢は夢で終わった。

若し、彼が日本の朝廷・幕府制度のことを知ったら、羨望の余りため息をついたであろう。ゼカリヤの夢も夢で終わった。祭儀と行政司法と宮廷生活が混合していた中世ヨーロッパの政府は、政府などと言えるしろものではなかった。それに比べれば、幕府即ち頼朝政府は何と素晴らしいものであったろう。恐らく、当時の世界の模範であったに相違ない。これは絶対に私の独断ではない。少しでも日本の歴史を知っている外国人はみな同じ感慨を持つ。』

私は、「朝廷・幕府の併存」が何故これ程の最大限の評価を得ることになるのか？私の職業により、39年間に亘って培ってきたエンジニアリング思考を駆使して考察・分析しました。**（補足５）**そこで、到達した結論は、「明治～1945年の敗戦までの天皇制」は、西洋の真似をして作り上げた「悪魔の天皇制」であり、イザヤ・ペンダサン氏が絶賛した「本もの天皇制」とは似ても似つかぬものだということです。

戦後77年間、日本人は残念ながら、この「悪魔の天皇制」と「本もの天皇制」の区別をつけることが出来ませんでした。一番大きな理由は、「自分の客観的な姿は、他人の目を通してしか分からない」からです。

イザヤ・ペンダサン氏は、日本人以上に日本のことを良く知っていますが、アイデンティティは紛れもなくユダヤ人です。ユダヤ人の両親からそれを受け継いでいるからです。ユダヤ人としての目を持つ同氏は、「本もの天皇制」については絶賛していますが、「悪魔の天皇制」については一言も触れていません。同氏自身、「悪魔の天皇制」の時代を経験し、その弊害の事実をいやと言う程体験しているはずです。それにも関わらず、彼は天皇制そのものを否定することなく、「朝廷・幕府併存」の天皇制を絶賛したことになります。西洋文化のマイナス面を知り尽くしている同氏にとって、西洋文化から派生した「悪魔の天皇制」は、コメントするに値しない代物だったということではないかと思います。

　天皇制は「戦争と平和」に深く結び付いています。「悪魔の天皇制」は戦争に結び付き、「本もの天皇制」は平和に結び付いています。戦後、先の大戦の結果から、前者はキリスト教等の宗教界、共産主義者等からの「天皇制廃止論」を呼び起こすことになります。天皇制を擁護する側も、「天皇制廃止論」に対するカウンターとしての位置付けの意味が濃厚で、日本会議のような団体はそのカウンターの力を利用して、天皇制を再び「悪魔の天皇制」に引き戻そうとしています。

**最大の問題点は、天皇制を擁護する側が、「本もの天皇制」に対する理解が不十分なため、「悪魔の天皇制」を「本もの天皇制」とミックスしてしまい、日本会議等が主導する「悪魔の天皇制」と明確に決別出来ていない点です。**

イザヤ・ペンダサン氏は、「本もの天皇制」のことを、日本人のみが行い得た政治上の一大発明と述べていますが、何故日本人のみがこの政治上の一大発明を行い得たのでしょうか？

これは、頭で考え出したというものではなく、 つまり発明と称するようなものではないと思います。「朝廷側も幕府側も共に大自然の懐に抱かれた存在であり、その大自然の意思に従う」という共通の基盤を持っており、その結果として、夫々の「ワガママ」（自己中心的な主張）を克服し、夫々の役割分担を明確にし、それに従うことを実行出来たということになるのだと思います。**特に大事なのが、武力を持ち政治的な権力を持つ幕府側が、朝廷側が示す「神意」に従うことが出来たという点です。これこそ、形を変えた「立憲政治」と言い得るものです。**

実は、**民主主義を成功させる上で最も重要なものが、この権力側（行政・司法・立法の各機関や軍・検察）が、「神意である憲法」に従うことが出来ることです。**ここに、米国やスイスなどで、市民が銃を持つことが許可されている根源的な理由があります。権力の暴走は、市民の銃でしか阻止出来ないという現実を、彼らは彼らの歴史の中で深く学んできたということだと思います。

そして、彼らのその常識を覆すものこそ、武士の時代の「朝廷・幕府併存」なのです。

5-5．西洋文明の根本的な問題点とそれを克服する日本精神

それを一言で言えば、「自己中心主義（自分ファースト）から抜け出ることが出来ないこと」と言えると思います。別の言葉で言えば、「植民地主義を今もって引きずっている」ということになります。米国の民主主義は、中国から「極めて優秀なエリート層である１％のための民主主義」と揶揄されています。事実、「人民の人民による人民のための政治」を唱えたリンカーンは、暗殺されてしまいます。リンカーンが暗殺された理由は、「通貨発行権を銀行団（FRB）から政府に移そうとしたため」という説があります。つまり、エリート層が運営する銀行団（FRB）は、通貨発行権を持つことにより、政府に財政的な圧力を行使することが出来るということであり、これにより巧みに政府をコントロールする力を有してきたということです。米国の政治は、民主党であろうと、共和党であろうと、実際の政治を動かしているのは、グローバル金融権力と軍（諜報機関を含む）が結び付いた軍産複合体です。この軍産複合体が支配する国家のことを、ディープ ステート（深奥国家）というのだそうです。

このような状況は、西側ヨーロッパ諸国も同様な状況になっているのではないかと推察しています。日本だって、日米合同委員会がディープ ステートの役割を果たしていると言っても良いと思います。

欧米エリート層は、彼らの世界支配にとって、日本精神が大きな阻害要因だと思っている兆候があります。その一つは、第二次世界大戦時の京都への原爆投下という、余りにも理不尽過ぎる日本文化（精神）に対する消滅提言として顕在化しました。**（補足６）**

それは、日本精神（彼らの表現で言えば「日本教」）が、彼らの世界支配にとって最大の障害になると思っているからだと推察しています。

また、1985年以降の米国の対日政策は、新自由主義の押付け、規制緩和政策、民営化促進等を通じて、日本社会の劣化や日本精神の消滅を狙っているように思います。つまり、日本をより完全な対米従属国家（米国の植民地国）にしようとする動きが強化されたということです。

これらは、日米合同委員会やＣＩＡ等の諜報機関を使って、政治家や官僚、マスコミ等日本社会のあらゆる組織に対する洗脳活動を通じて、日本人が日本人の手で日本人自身を縛るような形で行われて来たように思います。

しかしながら、欧米エリート層も一枚岩ではなく、「西洋文明は行き詰り、次の時代は東洋思想（日本精神）が世界に行き渡り、時代を牽引する」ことを認識している人々も存在するように思います。それは、欧米の富裕層が、その一つの方法として忍者研究を行い、忍者の背後にある日本精神を学び取ろうとしたことの中に顕れています。また、グローバル金融界から輩出したデービット・アトキンソン氏（英）が、文化財、神社、寺の修復工事を手掛けている小西美術工藝社の会長・社長に就任したことも、「日本精神とは何なのか」を知ろうとしている一つの例になると思います。

しかしながら、彼らはそこでも「時代の主役になり、支配者になり続けたい」と思っているものと思います。その為に、彼らは努力していると言っても良いと思います。

彼らの心の奥底にあるものは、「なんだかんだ言ったって、自分達が一番なのだ」という一つの選民思想（自分ファースト）を持っているのかも知れません。それは、「日本が彼ら以上に悪者である」という状況に日本を追い込むことにより、「日本を悪者に仕立て上げること」で、その思いを実現しようとしているように見えます。

このようなやり方は、欧米支配層が彼らの諜報機関を使って、世界支配のために行って来たやり方です。**（補足７）**しかしながら今、日本精神の総力を上げて欧米支配層の野望（＝西洋文明の根本的な問題点）を世に明らかにし、平和な世界を到来させる時期に差し掛かっているのだと思います。

イエス・キリストは、「あなた方は、神と富に兼ね仕えることが出来ない」（マタイ伝6：24）と述べ、富への執着を戒めました。「西洋文明の母体となったキリスト教が、実は西洋社会の中で、本当に意味で血となり肉となっていなかった」ということが言えると思います。その理由は簡単であり、「富への執着」を克服できなかったということに尽きると思います。日本精神を一言で表現すれば、この神と富との選択において、「神を選択する精神、富の誘惑を克服する精神」ということになると思います。

　西洋文明のもう一つの幹として、約百年前に生まれた共産主義思想があります。これは、神無き経済理論であり、人間が考え出した科学への信仰（無神論）がベースとなっています。しかしながら、これもソ連崩壊が意味するように、資本主義の横暴を抑え込んで、理想的な人間社会を実現することが出来ませんでした。

また、中国も毛沢東のカリスマ性を利用して共産主義国家の樹立に成功しましたが、経済を劇的に発展させるためには、西側の資本や技術を導入する改革開放路線に転換するしかありませんでした。事実上の国家資本主義であり、それにより日本のＧＤＰの３倍にもなる経済大国になり国民生活も豊かになりましたが、欧米諸国と同様に格差は拡大し、共産党幹部の腐敗が横行する状況になりました。ただ、中国式に国家の力を使って、資本主義が生み出した格差や腐敗を無くすように動いており、中国式の共産主義・資本主義・民主主義を模索しているように見えます。　米国自身が認めているように、中国は米国に対抗し得る唯一の国ということになります。しかしながら、巨大であるが故に中国にも弱点があります。それが、共産党一党の独裁であり、習近平主席への権力集中化です。勿論、これは巨大な中国を統治する上に於いて、現状止むを得ないものと思います。中国は、理想社会に向けて発展途上の状況であると見做すべきだと思います。

私は、日中が経済的にも、安全保障上も強固に協力関係を結ぶことが、欧米諸国に根強く残る自国中心主義（他国に対する植民地化主義）を終わらせ、２２世紀の世界を「戦争の世紀」から「平和共存の世紀」へ転換出来るスタートになり得ると思っています。いわゆる東アジア平和地域構想です。

　 何故なら、日本の本当の国柄である「平和国家・日本」、「憲法９条の国・日本」を達成するためには、周辺国との平和条約・不可侵条約締結が必要となり、それにより「日米安保条約廃棄」、「在日米軍撤収」に対する合理的な理由付が成立するからです。キッシンジャーが周恩来に説明した「在日米軍は日本を抑えるために必要」（ビンの蓋理論）が崩れ、日本は文字通り米国から自立・独立することが可能になります。

日本精神は、共産党一党独裁の中国を自由度の高い国に転換させること、即ち中国の弱点克服にも役立ちます。西洋文明は人間の欲望を追及することで、物質文明を開花させましたが、そこには人間自身の欲望を制御するシステムが備わっていませんでした。いわゆる「人間のワガママ」をコントロールする術が抜け落ちていたということです。しかしながら、東洋文明、とりわけ日本精神は、「人間が自然の一部である」ことを認識することで、「自然との調和・共存」の中に人間存在の意義を見出し、「自然の意向に従う人間の立場」を取り入れることが出来たということになります。

　 聖書の中に書かれている「神の国」は、日本精神が大きく寄与することで、この地上に実現することになると思います。今、その転換点に差し掛かっていると言っても良いと思います。

６．安倍元首相暗殺事件にもディープ ステート（深奥国家）の闇が？

第二次安倍政権は2012年12月26日に発足し、2020年9月16日まで継続し、歴代最長の長期政権となりました。在任中、2013年の特定秘密保護法、2014年の集団的自衛権の閣議決定、2015年の安保法制（戦争法）、2017年の共謀罪法を成立させる等して、自衛隊が在日米軍の下請けとして、戦争に参戦出来るための様々な悪法を成立させました。更に、ＴＰＰを初め、日本をグローバル企業や大企業に売り渡す水道民営化、種子法廃止、種苗法改悪、農薬規制緩和、農地法改悪、森林経営管理法、漁業法改悪、カジノ（ＩＲ）法、遺伝子組み換え食品表示消滅など数々の売国法を、国会議員の数にものを言わせて強行成立させてしまいました。堤未果氏の著書「日本が売られる」（2018年10月発行）によれば、日本を買い漁っている企業は、欧米だけでなく中国も含まれているとのことです。大体、安倍政権は「日本を取り戻す」と言って誕生した政権ですが、その間やったことと言えば、彼の天才的な嘘と誤魔化しを駆使して「日本を売り渡す」ことでした。やるせなさと激しい怒りを覚えるのは、私だけではないと思います。彼は、まさに米国ディープステート（軍産宗複合体）の意向に沿って動いた最長・最悪な売国首相でした。

その後、アベ政治は菅義偉内閣（2020年9月16日～2021年10月4日）、岸田文雄内閣（2021年10月4日～）は引き継がれ、対米従属・売国政治は継続中です。特に、岸田内閣は昨年安保３文書を閣議決定し、米国の対中封じ込め戦略の片棒を担ぐことを喜びとするよう感じで、敵基地攻撃能力（反撃能力）獲得に駒を進めようとしており、戦後国是としていた専守防衛政策を放棄しようとしています。タモリさんが指摘したように、新しい戦前が始まろうとしています。

2022年7月8日11時31分頃、安倍元首相は奈良県奈良市の近畿日本鉄道大和西大寺駅北口付近で、参院選応援演説中に統一教会に恨みを持つ山上徹也容疑者に、手製銃で銃撃され死亡しました。この暗殺事件により明るみに出た統一教会という反社・反日（コリアンナショナリズム）宗教について、岸田首相は最近の支持率上昇に気を良くし、解散請求を出すことに消極的です。この点もまさにアベ的政治は、継続中ということです。

安倍元首相の暗殺事件について、元外交官の孫崎享氏や週刊文春が、山上被告以外の致命傷を負わせた真犯人介在説を報じ続けています。対応した医師団が全容を事実のまま明らかにし、警察がきっちりした捜査を行えば、闇化することはあり得ない事件だと思いますが、医師団や警察をも従わざるを得ない大きな力が存在するということだと思います。そのような存在は、ディープ ステート（軍産宗複合体）以外にはあり得ないと思います。更に、統一教会という戦後最大級とも言える暗部の詳細は、安倍元首相の死を理由に、岸田首相らによってうやむやにされようとしています。

７．結言

　ウクライナ戦争があり、日本の元首相の暗殺という大事件があり、まさに暗黒時代の兆候が表れています。また、コロナワクチン接種後死者2000人超えも、とてもまともとは言えない状況です。八十年以上前の亡霊が再び暴れ出し、世界を三度大きな戦争に巻き込もうとしています。

　救いを民主主義に求めても、日本国民の投票率は極端に低下し、残念ながら諦めてしまった人が多いようです。ここは、思い切った発想の転換が必要だと思います。それは、「日の丸」の活用です。戦前の「WAR 日の丸」ではありません。「PEACE 日の丸」です。日本の本当の国柄は、「平和、人権重視、万民平等、民主」であり、「PEACE 日の丸」が相応しいです。今、世界的な視点から見れば、欧米社会で数百年にも亘って続いてきた植民地主義、選民主義が終わりとなり、「助け合い・支え合い」の新しい社会構築へと駒を進められるか否かの時点だと思います。それには、どうしても日本精神（日本教）の寄与が必要であり、重要となります。

　戦争国家・米国からがんじがらめにされ絶望状態の日本であっても、「PEACE 日の丸」（＝お天道さま）の力を信ずれば、心も軽くなり、希望を持って動くことが出来ます。そのような状況ですと、楽しく政治活動を行うことが出来ます。政治活動は、法律に抵触しないぎりぎりのところでまで行えば良いと思います。法律に抵触するようであれば、刑罰を受ける可能性がありますので、気持ちが暗くなってしまいます。「気持ちが暗くなるようなことは一切しない」、楽しくすることを心掛ける。楽しく、「投票を呼びかける、政権批判を行う」。

それを可能にするのが、左胸に付けた「PEACE 日の丸」（＝お天道さま）です。「心に太陽を」という言葉がありますが、まさにその状態で、楽しく政治活動を行おうというものです。イザヤ・ペンダサン氏は、「日本人は政治的な天才だ」と述べていましたが、今その天才ぶりを発揮する時です。政治は「祭りごと」だと言われています。日本式に、祭りの如くすれば良いのだと思います。

　そしたら、多くの人が「これは行けるかも？」と思うようになります。投票率も上がります。欧米に対する敗北主義、「日本悪い国」の原因も欧米支配層（ディープ ステート）から巧みに誘導された結果であり、冷静・公正に歴史を振り返り、「誘導された自虐史観」も払拭出来るようになります。元々、日本はお天道さま（日の丸）と共にある、良い国なのだと自信を持ち、「武力に頼らない」平和国家として歩んでいくと、訴えることが出来ます。

　元々日本人には、毛沢東や統一教会のメシア（文鮮明やマザー・ムーン）のような存在は必要ありません。依存すべき偶像は、必要ないということです。戦後77年間、欧米支配層（ディープ ステート）は日本人の精神構造を欧米人並みの自己中心的なものに、改造しようとしたのではないかと推察しています。その方が、日本人をコントロールし易いからです。しかし今、このような絶体絶命の状況であっても、日本人には「利他の精神」や「心に太陽を」のDNAが、依然残っています。　「可能な政治活動を楽しくやり通し、世界の状況が変っていくのを静かに見守り、待つ」、このような精神的なゆとりはまだ残っていると思います。

私は、「憲法を守る政党」である「立憲民主党、共産党、れいわ新選組、社民党等」に、「左胸に「PEACE 日の丸」を」（＝心に太陽を）付けて、楽しく政治活動をしましょうと訴えたいと思います。

　 2015年の安保法制反対運動が盛り上がっていたころ、日本共産党の志位委員長は、**「神を信じる者も信じない者も共に」**と言っていました。これは、「安保法制を撤回させるために、共産党も他の党も一緒になって戦いましょう」ということだと思います。その状況は今も変わらないと思います。**「神を信じる者も信じない者も共に心に太陽を」**という呼びかけをしたいと思います。

共産党の人が、左胸に「日の丸」を付けて街宣すれば、これはこれで凄いインパクトがあると思います。これ位のインパクトを見せ付ければ、世の中の政治状況は変わってくるものと思います。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　完

**（補足１）** 「日本人とユダヤ人」

「日本人とユダヤ人」の著者は、ユダヤ人のイザヤ・ベンダサン氏ではなく、彼の親友の山本書店主・山本七平氏だということが、発行後しばらく経って言われていました。しかし、それは完全なフェイク情報だと思います。戦後25年（1970年）の段階で、日本人が、「朝廷・幕府併存」を発明した日本人を政治天才だと絶賛し、ユダヤ人は政治的低能と評価することは考えられません。また、著書発行の1970年時に日本人が「日本人のアウシュビッツ送り化」を警告することも考えられません。多分、イザヤ・ベンダサン氏は米国支配層から、「その情報は日本人には知らせてはならないこと」ということで叱責されたものと思います。そこで、著者は山本七平氏だということで、その場を収めたということだと思います。

**（補足２）** 【「天の岩戸」神話】

神代(かみよ)の昔、空の上に高天原という神々の世界がありました。太陽の神天照大御神(あまてらすおおみかみ)や弟の須佐之男命(すさのをのみこと)、その他多くの神々が暮らしていました。須佐之男命(すさのをのみこと)は、田んぼの畦(あぜ)を壊したり馬の皮を逆剥(さかは)ぎにしたりと、大変な暴れん坊でした。あまりにひどいいたずらにお怒りになりました天照大御神(あまてらすおおみかみ)は天岩戸(あまのいわと)と呼ばれる洞窟にお隠れになりました。太陽の神様がお隠れになると世の中は、真っ暗になりました。食べ物が育たなくなったり、病気になったりと大変なことが次々と起こります。

困りました八百万(やおよろず)〈大勢〉の神々は天安河原(あまのやすかわら)にお集まりになられ、御相談かわされます。御相談の結果天岩戸(あまのいわと)の前で色々な事が試されて行きます。　まず、長鳴鳥(ながなきどり)を鳴かせてみます。  
　〈鳴かせてみました長鳴鳥(ながなきどり)、これが今の鶏です。朝、鶏が鳴きますと太陽が昇ってきます、鶏の鳴き声には太陽の神様を呼ぶ力が有ると言う事で鳴かせてみます。現在でも、鶏を放し飼いにしている神社がありますが、元はこの長鳴鳥(ながなきどり)から始まっています。〉  
　　しかし、天岩戸(あまのいわと)の扉は開かず失敗しました。

  　　次に、天鈿女命(あめのうずめのみこと)が招霊(おがたま)の木の枝を手に持ち舞をされ其の回りでほかの神々で騒ぎ立てます。すると、**天岩戸(あまのいわと)の中の天照大御神(あまてらすおおみかみ)は「太陽の神である自分が隠れて居るから外は真っ暗で、みんな困って居るはずなのに、外ではみんな楽しそうに騒いでいる。**これはどうした事か？」と不思議に思われて天岩戸(あまのいわと)の扉を少し開けて外を御覧になられます。神々は、騒いでいる理由を伝えます。「あなた様より美しく立派な神がおいでになりました。」「お連れ致します。」と言い鏡で天照大御神(あまてらすおおみかみ)の顔を写しました。自分の顔だと分からなかった天照大御神(あまてらすおおみかみ)は、もう少しよく見てみようと扉を開いて体を乗り出しました。その時、思兼神(おもいかねのかみ)が天照大御神(あまてらすおおみかみ)の手を引き、岩の扉を手力男命(たぢからをのみこと)が開け放ちまして天照大御神(あまてらすおおみかみ)様に天岩戸(あまのいわと)から出て頂くことが出来ました。

**（補足３）** エドワード・スノーデン氏

エドワード・スノーデン氏は、日本には在日米軍基地周辺を中心に、約1000人位のＮＳＡ（アメリカ国家安全保障局）やＣＩＡ（中央情報局）等の諜報員がいるということを告発しています。彼らは、日本国内のあらゆる情報を吸い上げ、それを分析し、「日本が米国を裏切らないか」を監視しているということです。そのことを明らかにしたスノーデン氏は西側諸国では生きられず、中国経由でロシアに亡命しました。

**（補足４）** 一般社団法人・倫理研究所

倫理運動は、敗戦後の1945年9月3日に、世情が混乱し、道義の退廃した国の姿を憂えた丸山敏雄先生（1891-1951）が、道義の確立をもって日本を再建する為、論文「夫婦道」の筆を執ったことから始まりました。[1946年](https://ja.wikipedia.org/wiki/1946%E5%B9%B4)12月に『新世文化研究所』を設立し、1951年10月に「倫理研究所」と改称し、社会教育団体として、丸山敏雄先生が唱導した「純粋倫理」という思想と、実生活におけるその効力・効用に研究の主眼が置かれ、雑誌の街頭頒布や講座・講演会などの啓蒙活動を行っています。（注：本論文の１章「人類の朝光」の名前は、丸山敏雄先生が啓蒙活動時に出版された本の題名です）

実は、私自身、同研究所の会員となり、1988年頃から2004年頃まで普及員として普及活動に参加していました。そして、2005年以降は、職場が多忙になったこともあり、普及活動からは身を引きましたが、2014年初秋までは、細々と会員を続け、「新世」や「倫理」という雑誌も購入していました。従って、同研究所の学びに付きましては、体に染みついています。活動内容を簡単に言いますと、「毎日を前向きに、明るく、楽しく生きて、他人を喜ばすように実践しよう」と言うものです。自民党が野党時代に、当時の谷垣総裁が、「良質な保守」という言葉を使った事がありますが、倫理研究所は間違いなく「良質な保守」と評価されると思います。私の保守的な傾向（「象徴天皇制の尊重」など）は、同研究所とのかかわりの中で自然に身に付けていったものです。そして、同研究所は、日本ばかりでなく、中国、台湾、米国、ブラジルなどにも運動の拠点を持っており、その活動が、今後の世界平和にも大きく貢献する力を持っているのではないかと思っております。

しかしながら、2015年7月30日、ウィキペディアにより、「倫理研究所」が「日本会議」のメンバーになっていることを知り、大変驚愕しました。「日本会議」という日本最大の右翼組織は、安倍首相初めとしたタカ派右翼と言われた人々が主導しており、米国の意向を受けて、中国封じ込め政策をとっているため、「世界平和構築」に縁遠い団体だと思うからです。「倫理研究所」は、中国のクブチ砂漠の緑化活動にも参加し、中国社会科学院のような研究機関とも交流があるようですし、中国人スタッフがいる上海事務所も持っています。どう考えても、中国を敵国として煽り立てる安倍政権との距離は、物凄くあると思います。

私が普及活動を行っていた時代（2004年以前）には、同研究所関係者から「日本会議」の話を聞くことは、全くありませんでした。「日本会議」には、NHKの経営委員で、埼玉大学名誉教授の超右派論客である長谷川三千子氏が所属しています。この長谷川三千子氏と「倫理研究所」の交流は、10年位前、2006年頃から始まったのかも知れません。その頃、研究所主催の講演会で、同氏が講演し、その講演の内容が同研究所の雑誌に紹介されていました。その内容の詳細は覚えていませんが、主旨としては、「古事記は、聖書と比較した時、それに勝ると言ってもいい程、理知的で緻密な素晴らしいものである」ということだったと記憶しています。つまり、日本文化の素晴らしさを訴えたものでした。その頃、私は、彼女が超右派論客である事など知る由もなく、「へー、そうなのか。古事記はそれ程素晴らしいのか」と思い、日本文化に対する誇りのようなものを感じたと記憶しています。これは、私の推測ですが、多分、10年位前から、超右派サイドから、良質右派への接近が開始され、日本会議に良質右派を取り込む動きが始まったものと思います。日本会議メンバーとなっているモラロジー研究所、オイスカ・インターナショナルも、良質右派と位置付けてよいものと思いますので、「倫理研究所」と同じように取り込まれたものと思います。

確かに、皇室尊崇の気持ち、日本の伝統を大切になど、「生長の家原理主義」と言われる「日本会議」と「倫理研究所」は似通った思想を持っていると思います。多分、「倫理研究所」が取り込まれていった理由は、安倍首相の「戦後レジームの脱却」に共感し、日本人の手で「自主憲法」を作らなければならないということへの同調であるような気がします。「戦後レジームの脱却」とは、東京裁判史観を否定し、対米従属意識を打破し、日本の伝統的な価値観を復活させようとするものでしょう。しかし、安倍政権が推進する安保関連法（戦争法）やTPPにより、日本はむしろ「戦後レジームを深化」してしまいます。そして、自民党改憲草案は、最早、憲法の名に値しない、魂の抜け殻のような代物です。

また、沖縄県は、倫理運動がとても盛んな県ですが、過大な米軍基地負担に苦しみ、辺野古新基地建設や高江ヘリパッド増設に県民の民意は大反対です。そのような事態に、「倫理研究所」は、一体どのように向き合っているのでしょうか？「倫理研究所」の幹部の方々には、出来るだけ早く安倍政権の欺瞞性に気付いて頂き、戦後の日本国憲法の下でも、日本精神はその力を失うことなく、むしろ大きく伸ばすことが出来るという認識に至って頂きたいと思います。何故なら、日本国憲法は、明治憲法よりも、個人の自由をより尊重しており、その分だけ日本精神は自由に広がることが出来るからです。

私が、倫理普及運動に係わっていた頃は、基本的に政治に深く関わらないということが、倫理研究所の方針でした。とするならば、「日本会議」へのメンバー入りは如何なものかと思います。現理事長・丸山敏秋氏（1953年生れ）は、創始者・丸山敏雄先生のお孫さんです。丸山敏雄先生の書かれた「“万人幸福の栞”・第三 真人生の成就・その一 道義の革新」の中に、「戦争を放棄する新憲法をたてて、世界平和のまっさきに立った」という文があります。「倫理研究所」は、世界平和のまっさきに立てる要素を持っていると思います。どうか、そのような方向に進んで頂きたいと思います。因みに、生長の家本家は、「日本会議」の生長の家原理主義者達とは、一線を画し、安倍政権が強行成立させた安保関連法（戦争法）に反対する姿勢を表明しています。平和を求める宗教団体ならば、これが当たり前の対応だと思います。（2017.1.20 記）

**（補足５）** 私のエンジニアリング思考

６４歳までは高炉（溶鉱炉）を設計する機械エンジニアとして、大手製鉄会社の子会社　に勤務していました。会社での立場は、下から数えた方が早い位の人間でしたが、39年間の仕事を通じて自然と身に付けたものが以下に述べる三点です。

1)最も大きなものは、物理の世界で訓練されてきたということです。この物理の世界で　最も重要なことは、「事実と真実に基づく」ということです。そして、巨大な高炉というプラントに係る全ての人々が、物理の世界の原則に従い、「事実と真実に忠実」でなければなりません。若し、その原則に反し、その巨大な設備に虚偽が入り込めば、設備は大きなトラブルや事故を発生させ、巨額な損失が生じることになり、その結果、関係者はみんな不幸になります。理解し易くするため、極端な例を挙げるならば、設備費を下げるためと称して、設計計算書を偽装して高炉鉄皮の板厚を必要板厚の十分の一にしてしまったら、稼働後高炉は早々に破裂事故に見舞われてしまい、悲惨な結果になります。従いまして、私は40年近く設備の安全を確保するために、虚偽を排除し、「事実と真実に忠実」である訓練をしてきました。

2)次が、幅広い領域を見渡しながら、夫々の関連性を考える訓練をしてきたということです。巨大な高炉の設計エンジニアリングは、プラント全体について一通りの業務経験をするためには、運良く順繰りに担当したとして最低15年位かかってしまいます。その中で、この巨大なプラントが正常に稼働するためには、プラント全体における全ての設備、装置、場合によっては一つの小部品でさえ不完全であることは許されません。従って、業務の中で、各設備同士、装置、部品の関連性に付いて、プラント全体を見ながら考える思考パターンを、自然に身に付けてきたのだと思います。

3)最後が、「1を知って、10を推測する」訓練です。

それは、機械設備トラブル対策で生まれたものです。機械設備に現れたほんのちょっ　とした兆候で、トラブルの本当の原因を推論し、その推論が事実として表れた兆候と整合性があるか否かを検証していくものです。そのような方法で、トラブルの本当の原因を確定し、その原因に基づいたトラブル対策を構築していくというものです。その為には、「1を知って、10を推測する」能力が必要になります。そして、ここではまた、事実に基づき本当の原因を突き止めなければ、決して解決可能な対策を取ることが出来ないという事を学びました。

そして、仕事を通じて訓練してきた以上３点のエンジニアリング思考力は、退職後の　日本や世界に起こっている様々な問題に付いて、可能な限り広い視野で、関連性を考察・分析する際の力になっていると思います。

**（補足６）** 「日本人の戦意を完全に喪失させること」

ジョン・フォン・ノイマン（1903年～1957年）は、ハンガリーのブダペスト出身でアメリカ国籍を取得したユダヤ人です。アインシュタイン（1879年～1955年）から私よりも頭の良い人間と言われ、ＩＱが300もあったと言われており、20世紀最大・最恐の天才です。彼は、原爆の開発に携わった物理学者でありながら、心理学者、政治学者でもありました。太平洋戦争時に、彼が強く主張したのは、「京都への原爆投下」です。「**日本人の戦意を完全に喪失させること**を最優先の目標とし、歴史的文化的価値が高いからこそ、京都へ投下すべき」という理由です。京都にとって幸いなことは、京都の芸妓でアメリカの大富豪ジョージ・デニソン・モルガンの妻となった「お雪さん」（本名 加藤ユキ）（1881年～1963年）が、この情報を聞きつけ、親戚のモルガン家に「京都への原爆投下中止」を要請し、モルガン家がアメリカ政府に動きかけたことで、「京都への原爆投下」は中止になったということです。しかし、代わりに広島と長崎への原爆投下となってしまいました。

私は、ノイマンの「**日本人の戦意を完全に喪失させること」**が、1985年以降の米国支配層に引き継がれているのではないかと推察しています。これは、具体的には「日本精神」を消滅させることを、意味しているのではないかと思います。

また、米国支配層のこのような意思の存在を警告してくれたのは、**（補足１）**で述べたイザヤ・　ペンダサン氏です。彼は著書の中で、「日本人のアウシュビッツ送り化」の確率は、米国が日本に原爆を投下した確率よりもはるかに高いと警告しています。如何にすれば、日本はこの大困難を乗り越えることが出来るのでしょうか？私は、第二次安倍政権以降の自公政権のように、「国民を犠牲にした、ひたすら米国へのご機嫌取り」というやり方では、軽蔑され、簡単に「アウシュビッツ送り化」が決定されてしまうものと思います。多分、一つの道しかないように思います。イザヤ・ペンダサン氏等が、ため息が出る程感嘆した日本人の政治力を発揮して、「日本精神」を母体とする「日本国憲法」に基づく社会や社会形態を実現し、それを世界に拡げ、世界全体を平和社会に変えていくということです。

**（補足７）** イギリスの特殊工作員の例

西太合（1879年～1955年）は、清朝の[咸豊帝](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%92%B8%E8%B1%8A%E5%B8%9D)の側妃で、[同治帝](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%90%8C%E6%B2%BB%E5%B8%9D)の母。清末期の権力者で、中国でも、日本でも、悪女の代表のように語られてきました。しかし、BS NHKの放送をたまたま視聴しましたが、事実はかなり違うようです。外国勢力から何とか清を守ろうと、懸命に政治力を発揮していた人物として紹介されていました。彼女のお蔭で、清朝は何とか50年程長く独立を保つことが出来たとされていました。

彼女が悪女となった根拠は、エドマンド・トリローニー・バックハウスが（ジョン・ブランドとの共著で）出した『西太后治下の中国』によるものですが、それらは全く事実に反したもので、完全なフィクションであったものもあります。**後になって、エドマンド・トリローニー・バックハウスはイギリスの特殊工作員であったことが判明しています。**そして、これらの流説や俗説を事実として伝え、イギリスが[辛亥革命](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%BE%9B%E4%BA%A5%E9%9D%A9%E5%91%BD)を後押しするきっかけを作ったと考えられています。[加藤徹](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%8A%A0%E8%97%A4%E5%BE%B9)も、『西太后』（中公新書、2005年）で、このことにふれています。このことは、英国の植民地主義を実行する調略を証明するもので、香港や台湾問題も、日本などの西側メディアが伝えることを額面通りに受け取ることは、大きな間違いである可能性があります。

私の友人・同窓生である田中哲朗君掲示板に、本論文は掲載して貰っています。

YASUTO NOTEのアドレス

<http://okidentt.sakura.ne.jp/iken/yasuto/yasuto.htm>